



原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

(瀬田玉川神社禰宜・公益財団法人
鎮守の森のプロシエクト事務局次長)

第八回 □バート・フォーチュン 『幕末日本探訪記』(後編)

未知の植物の採集のために日本にやってきたバート・フォーチュン。前回の繰り返しにはなりますが、植物学者ならではの視点から、数々の点で欧米よりも先を行っている日本の園芸文化に驚きを示しています。

「サボテンやアロエのような南米の植物を注目した。それらはまだシナでは知られていないのに、日本へは来ていたのである。実際それは識見のある日本人の進取の気質をあらわしている」と分析したり、また浅草で菊作りを見て「日本の園芸家は、菊作りの技術にかけては、われわれよりも大分うわ手で、不思議と大輪の花を咲かせる。が、その世話が大変な

もので、良質の土壌と、そして一本の茎にわずか一輪か二輪の花を咲かせることに成功している」と掛け値なしに高く評価しています。

一方、彼は植物学者ですが、日本人の生活文化についてもよく観察しており、当時の日本人の民度の高さを逆に教えられます。

例えば、外国人向けに発展した横浜の繁華街を見物した際に、豊富な物産が陳列販売されている様子を見て、小さな象牙の彫刻や金属製のバックル類を「立派な骨董品である」と書いたり、「彫刻者の手腕を示すそれらの陳列品は、好適な光線を受けて、確かに驚くべき努力と勤勉

の効果を示している」と繊細な職人技術の高さを評価しています。

また、大きな玩具店に立ち寄れば、そこには心棒に小皿のついた唸りゴマ、硝子鉢に入った小亀の群れ、あどけなく可愛らしいおもちゃの数々。ひげ剃りをしたり、髪を切ったり、腹を押えろと大声で鳴く人形など、多種多様なおもちゃが陳列されている様子を見ます。このことを彼は「日本人がいかにか子供好きであるかを証明している」と言っており、以前に紹介したカッテンディーケが、日本人は子供に対して深い愛情を注ぐ民族だと表現したこと、全く同じです。

さらに、お風呂好きの習慣を見て、日本人がとても清潔であったことを紹介しています。

「入浴は日本人の習慣の一つで、シナ人の喫茶の風習と同様、日本人の生活の必須条件である。午後でも夕方でも深夜でも、いつでも入浴している。家族用に自宅に風呂場を備えている者や、貧しい人達は、ごく安い湯銭で公衆浴場で満足している。長旅から帰った時、昼間の労働で疲れた時、日本人は、入浴がとりわけ気持よく、愉快だと考えている」



□バート・フォーチュン

す。例えば、日本の紙文化の多様性です。「日本紙がカミノキ(カジノキ)の樹皮から作られていることを述べておきたい。日本紙は特に装飾用として、室内に張るのに大変適している。手ざわりが絹みたくて体裁もよく、図柄の多くは大変あっさりして洗練されている。扇面をパツとひらいたような図柄は、駐日外国人宅に好んで使われている」

「……日本の油紙は非常に品質優良で、用途は多方面に利用されている。どんな雨にも耐えられるので、きわめて安価な雨合羽を着用することができる。上等な絹織物や他の高価な織物を、雨や湿気から守る包紙としても重宝である。また、非常に丈夫なので、しばしば錫や鉛の代りに包装に使われる。革のように耐久力の強い文箱も紙で作られるし、同様に封筒、財布、たばこ入れ、傘その他、あらゆる日用品が紙でできている。これらの用途に付け加えると、西洋では硝子を適用している窓に、日本では紙を用いている」

世界一の大都市(百万人)の胃袋を支える食料事情についても、こう記録しています。

「食料品は、商業地区の町では、どこにも豊富に陳列されている。私がすでに所々で指摘したように、日本にはどこでも野菜や果物が沢山あって確かに安い。

江戸湾では市民に供給する上等な魚がとれるので、魚屋は必然的に商人仲間の頭株であった。魚は死んでいるものや生きているもの、また新鮮なものや塩魚も売っていた」

東京・新橋にある私の行きつけの小料理屋では、池波正太郎の『鬼平犯科帳』に出てくる江戸料理を再現したメニューがあります。旬の野菜や魚を使い、様々な調理方法で素材の味を引き出しており、とても気に入っているのですが、フォーチュンのこの記述を読んだ瞬間その料理を思い出しました。ある意味で、現代よりも贅沢なものを江戸の人々は日常的に食べていたのかもしれない。

ところで、フォーチュンが来日した時期は、桜田門外の変、英国公使館襲撃事件、生麦事件、米国公使秘書官殺害事件など、開国に伴う反作用が流血事件の形で起こり始めた時期でした。それを間近で見ていた彼は何を感じたのでしょうか。

先に答えを言ってしまうれば、日本人の仇討ちの文化、それに注目したようです。日本人が大好きな『忠臣蔵』の物語に代表されるように、忠誠心や誇りを命よりも大切にしながら当時の武士社会でしたが、そのことを次のように捉えています。

「……アメリカ公使館の秘書官の暗殺は、町で秘書官に殴られた家中の者の仕業だったそうだ。殴られた家来が戻って来ると、主人の大名に『返報したか』と訊かれて、『では、やって来ます』と、決行したという」「氣位が高く、復讐心の強い日本人は、彼らの敵がもし外国人であれば、同一人に固執しないことを私たちは知っている」「たとえば無礼を働いたイギリス人を見つからないと、同国人が被害者にならねばならなかった」「仇討ちの願望は、被害者の生涯の間に果たさなくてもよい……彼の一生の間に仇討ちを遂げることができなかつたら、縁者に義務として本懐を遂げるよう、言い遣すのである」と。

そして、こうした武家社会から新しい社会に移り変わろうとする日本の近未来を「この幸福で平和な日本の国が、世界列強の仲間入りをするための代償として、遠からず、心配されている戦争や、それに付随するあらゆる惨害は避けられないだろう」と、この植物学者はみごとに予期したのです。